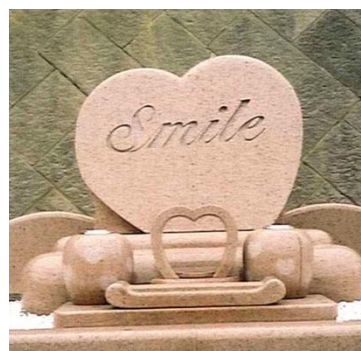


可愛らしいハート型お墓

第12回で入選した愛媛県松山市の宇都宮祐太さんは生まれて間もなく亡くなったわが子のお墓で入賞した。「頼・・・らい・・・」。生まれて間もなく、わずか5ヶ月間の命でした。でも、ありがとう。触れると壊れそうなちっちゃなからだで・・・。私たち夫婦に、いっぱいのお愛 ありがとう。さみしくなったら逢いにくるよ。ハートの椅子に腰をおろし、「頼」のこと 思うよ。その時、流す涙は・・・君のため・・・。



第13回で入賞の静岡県牧之原市の九島 祐海子さん（当時50代）は、墓石をハート型にくりぬき、そこに故人が好きだったお花立をデザインした。お墓は家族の「愛」そのものです。本当にお花が好きな主人で最後まで大好きなお花に囲まれながら旅立ちました。石碑には、家族の想いを表現した「愛」の文字をさりげなく彫刻いたしました、という。



第13回では大阪府泉南郡の古林 徹さん（当時57歳）が入賞した。「お墓に触りたい」という表現は似合わないと思うが、自然な感情で思わず触りたくなるような形のものをイメージしたいと考えた。中学校の時、美術の先生から「目を閉じて触って気持ちの良い形とはどんなものか」という質問を受けたことが印象に残っていた。数回のやり取りの後、ふわあと軟らかい、やさしいハート型となった。ハートは「心の問題」の大切さにも通じる意味があるとも感じた。



ハートの置き方については、左右対称に置くというシンプルな考え方もあった。しかし、こころは人生と同じように複雑でもあること、また美的センスの面からも傾けて置くということにした、という。



第 15 回に熊本県八代市の岡野 文明さん(当時 56 歳)が入賞した。墓石手前の貼り石にハート型の切り込みをいれ、そこに白い玉石を詰めた。墓石に刻んだ文字は「Sincere Heart」(誠実な心)。

山の上にあった先祖の墓に、父の命日にお墓参りに出かけた伯母が、坂の途中で転倒し、今でも車イスの生活を送っています。この事がきっかけとなり、年老いた父の兄弟や親戚の人たちにも気軽に足を運んでもらえるような場所に、お墓を建てたいとの思いから自宅のそばの墓地に移すこととなりました。我が家に来られた際には、いつでもお墓参りをしてもらえる様に、お花いっぱいのお花壇にふくろうのオブジェやイスをおいて、全体的にとても明るい公園風に出来上がりました。墓石はオシャレでハイカラさん

だった父をイメージして、明るい洋型デザインにし、ステンドグラスにはお花が大好きな母の意見を取り入れバラを選びました。墓石に刻んだ「Sincere Heart」という文字は「誠実な心」。永年郵便局員として仕事一筋に頑張ってきた父。何事にたいしても誠実に向き合っていた父の心を刻みました。

第 19 回では埼玉県川口市の住井 一宏さん(当時 57 歳)が特別賞で入賞した。

「家族愛」を真っ赤なハートで表現。ミッキーとミニーを墓前に配している。「人を愛する心」、「人から愛される幸せ」、「家族愛」を真っ赤なハートで表現し、ハートと黒色の台座をうまく組込ませ、ハートが宙に浮いて見える様に工夫しました。もちろん香炉もハート型にし、それを黒色の花立で支えているようにデザインしました。家族みんなが大好きなミッキーとミニーをハート型の台の上に設置しました。*ミッキー&ミニーは著作権等許可済みの石像です。

